【論　文】

2種類の倒置文*

木　村　宣　美

0. はじめに

Huddleston and Pullum (2002: 1107) によれば，(1) で示されているように，比較節 (comparative clauses) において，主語が文末に生じることがある。すなわち，(2) から導かれる文 (1) では，複数の助動詞に主語が後続することが許される。この問題は，これまであまり関心が向けられてこなかった問題である。

(1) a. It is no more expensive than *would be* the system you are proposing.

b.*It is no more expensive than *would* the system you are proposing *be*.

(Huddleston and Pullum 2002: 1107)

(2) It is no more expensive than the system you are proposing *would be*.

(3) a. He works harder than his father *works*.

b.*He works harder than *works* his father. (Huddleston and Pullum 2002: 1107)

ここでの倒置の効果 (the effect of the inversion) は，対照的な主語 (a contrastive subject) を文末に置くことにある。例えば，(1) では 先行談話の名詞句を指示する代用表現の it と the system you are proposing とが対照されている。この構文において注目に値する現象は，(1a) のように，主語が複数の助動詞 would be の後に生じることは許されるが，(1b) からわかるように，主語と助動詞の倒置 (subject-auxiliary inversion: SAI)が適用された，主語が would のみと倒置することは許されないという事実である。(1a) が文法的である一方で (1b) が非文法的であるということに基づき，Huddleston and Pullum (2002) では，主語が文末にあることから，主語の後置 (subject postposing: SP) との類似性が指摘されている。その一方で，(3b) が非文法的であることから，動詞は語彙的動詞

---

* 本稿は，日本中部言語学会第62回定例研究会（静岡県立大学；平成27（2015）年12月12日）での発表内容に大幅な加筆修正を加えたものである。本稿では，著者が独自に，図形を加えたり，ボールド体で表記した箇所がある。（複数の）助動詞（時に動詞）は斜字体で表記し，主語には下線を引き，前置された句あるいは動詞句は太字体で表記する。なお，本研究は，令和2年度－令和4年度日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（（基盤研究（C）研究課題『2種類の助動詞倒置文の基底構造と派生メカニズムの解明』（課題番号20K00656））に基づく研究成果の一部である。

(lexical verb) ではなく助動詞でなければならないことがわかる。このことから，主語と助動詞の倒置 (SAI) との類似性も同様に指摘されている。(1-3) に基づき，Huddleston and Pullum (2002) では，比較節内の倒置文は，主語後置 (SP) と主語と助動詞の倒置 (SAI) を混ぜ合わせたような特徴を有する構文であるとの分析が提案されている。本稿の目的は，Huddleston and Pullum (2002) の主語後置と主語と助動詞の倒置とを混ぜ合わせたような特徴を有する構文があるとの分析を批判的に検証し，2種類の異なる倒置文，すなわち，1) SAI が関わる倒置文と 2) SAIが関わらない倒置文，すなわち，複数の助動詞に主語が後続する倒置文が存在することを明らかにすることにある。

1. 主語と助動詞の倒置 (SAI)

Emonds (1976: 21–22) は，(4) で適用されている主語と助動詞の倒置を (5) として定式化している。

(4) a. *Is* Mary coming?
b. *Will* they support us?
c. *Did* you burn the papers?

(5) **Subject-Auxiliary Inversion:**
COMP – NP - AUX - X ⇒ 1 – 3 – 2 – 4
where 1 dominates WH or NEG or *so*. (Emonds 1976: 22)

SAIは根変形 (root transformation) であり，一番高次の S (the highest S)，すなわち，root Sでのみ適用される規則であり，従属節等で適用されることはない。[1]

Emonds (1976) は，SAIとは異なる仕組みが関わる倒置文が存在することを指摘している。Than や asに導かれる比較節は root S ではないので，SAIが適用されないことが予測されるが，主語名詞句と助動詞の倒置が適用されたと思わせるような現象が存在することが指摘されている。しかしながら，この現象は，Emonds (1976: 24) によれば，通常の SAIとは異なっている。比較節内における倒置では，主語が代名詞である時，倒置が許されない。

(6) a. We saw the same man as *did* John.
b. She spoke more convincingly than *did* Harry.

(7) a. *I hope you found the play more interesting than *did* we.
b. *Our friends can't afford to buy records as often as *can* you.

(7) から明らかなように，代名詞が助動詞と倒置されることはない。通常の SAIとは異なった特性

[1] 従属節内における根変形の適用については，Hooper and Thompson (1973) を参照。

である。また，SAIは規則の適用が義務的 (obligatory) であるのに対して，(6)と (8) からわかるように，比較節での倒置は随意的 (optional) である。

(8) a. We saw the same man as John *did.*
b. She spoke more convincingly than Harry *did.*

(6–8) から，Emonds (1976) は，SAIとは異なる仕組みが関わる倒置文であると主張する。

Chomsky (1986: 68) では，主語と助動詞の倒置は主要部移動 (head movement)，すなわち，ゼロレベルの範疇 (zero-level categories) の移動として分析される。

(9) a. How tall *is* John?
b. $[_{CP}$ ... $[_{C'}$ C $[_{IP}$ NP $[_{I'}$ I $[_{VP}$ V ...]]]]] (Chomsky 1986: 68)

(9a) を導くために，動詞 beが IP (inflection phrase) の主要部Iの位置に移動し，Iと融合 (amalgamating) する。この新しく作られた屈折要素 V_Iが CPの主要部である Cに移動する。Iは語彙的に接辞 (affix: *Af*) として同定され，V_Iを形成する Vの Iへの移動は許される。このように，Vが直接 Cに移動することはない。仮に Iが法助動詞であれば，Vが Iに付加し，Cに移動することは許されない。このように，VPの主要部 Vが CPの主要部の位置に移動することができるのは，IPの主要部 Iを経由し，屈折 (inflection) と融合する時のみであり，(10) の派生は，主要部移動制約 (head movement constraint: HMC) (11) により，排除される。

(10) *$[$How tall$]_j$ be$_i$ $[_{IP}$ John $[_{I'}$ will $[_{VP}$ t_i $t_j]]]$? (Chomsky 1986: 68)
(11) Movement of a zero-level category β is restricted to the position of a head α that governs the maximal projection γ of β, where α θ-governs or L-marks γ if α ≠ C. (Chomsky 1986: 71)

(10) では，I に統率された (governed) 動詞句の最初の動詞 (the initial verb) 以外の要素 beが I に移動している。この移動は，(11) の HMC により排除される。

2. 2種類の英語倒置文：Brueing 2015

Brueing (2015) では，英語の SAIでは典型的な語順である主語 - 助動詞 - 動詞が助動詞 - 主語 - 動詞の順番で具現されるとし，SAIは疑問節や条件節や比較節等の様々な構文や一定の要素が前置される環境で観察されることが指摘されている。しかしながら，このような倒置の現象を，SAIで統一的に扱うことは難しく，2種類の異なるタイプの倒置が存在することが指摘されている。すなわ

ち，複数の助動詞 (multiple auxiliaries) が関わる倒置と関わることができない倒置があることが指摘されている。SAIの有望な理論的な説明は，IあるいはT (ense) がC に移動する主要部移動であるが，この移動は，一つの助動詞が主語と倒置するタイプを説明することはできるが，複数の助動詞が倒置する場合は説明することができない。このような倒置では，Culicover and Winkler (2008) の分析と同様で，通常のTPの指定辞 (SPEC) とは異なる低い位置に主語が存在する可能性が示唆されている。

2種類の異なるタイプの倒置は，1) SAI が適用されることにより導かれる，助動詞と主語が倒置する現象 (12) と 2) SAIで扱うことのできない複数の助動詞と主語が倒置する現象 (13) に分類される。

(12) a. **Yes-No Questions**

Is Mary coming! (Emonds 1976: 21)

b. **Tag Questions**

Mary had come, *hadn't* she? (Emonds 1976: 27)

c. **Negated Constituent Preposing**

Under no conditions *may* they leave the area. (Emonds 1967: 28)

d. **Conditionals**

Had he done as he was supposed to, he would not be in this mess right now. (Brueing 2015: 2)

e. **Fronted *So/As***

i) The sun came out and so *did* the vacationers.

ii) The hotel had free wifi, as *did* the beach club, but it was very slow. (Brueing 2015: 2)

(13) a. **Comparative Substitution**

More important *has been* the establishment of legal services. (Emonds 1976: 35)

b. **Participle Preposing**

Speaking at today's lunch *will be* our local congressman. (Emonds 1976: 36)

c. **PP Substitution**

Here *will be (will stand)* the memorial to the war dead. (Emonds 1976: 37)

d. ***So* Inversion**

The results of education are long term and far reaching and **so** *must be* our commitment.

(Toda 2007: 189; cf. Brueing 2015)

e. ***Nor* Inversion**

I haven't been surprised by the rally, **nor** *should have been* my readers.

(Park 2012: 326; cf. Brueing 2015)

構文 (13) の主語は，通常 TPの指定辞にある主語が，複数の助動詞に後続する位置に生じることが許されているが，(15) に見られるように，構文 (12) の主語は，複数の助動詞と倒置することは許されない。

(14) Those students have been studying all night.

(15) a. *Have* those students been studying all night?

b.**Have been* those students studying all night?

c.**Been* those students have studying all night? (Brueing 2015: 1)

Brueing (2015: 1) によれば，(15) から明らかなように，SAI が関わる倒置において，複数の助動詞が含まれている時，主語と倒置するのは，最初の助動詞のみであり，2番目の助動詞や複数の助動詞と主語が倒置することはない。

Brueing (2015: 13) では，WH疑問文等の (12) の構文（特にアメリカ英語 (American English) ）において，複数の助動詞と主語の倒置が許されないことが指摘されている。

(16) a.*I understand that the head coach would have done that, but **under no circumstances** *should have* the assistant coach.

b.*I understand why the puppy must be neutered, but **why** *must be* the kitten, too?

c.*I know that the dog must be brought along; *should be* the cat, too?

d.*The other fairies were all invited; *had been* Maleficent, this tragic story would never have occurred.

(16) で示されているように，否定語前置 (negative fronting) (16a)，WH疑問文 (16b)，yes-no疑問文 (16c)，条件節で接続詞 if が省略された時に起こる倒置 (16d) では，複数の助動詞が主語と倒置することは許されない。

Brueing (2015) では，英語における主語と助動詞の倒置は単一の現象ではなく，一つの助動詞との倒置が許される倒置と複数の助動詞との倒置が許される倒置があることが指摘されている。SAI，すなわち，IあるいはTのCへの主要部移動が適用されるのは構文 (12) であり，構文 (13) では主語が TPの指定辞ではなく，低い位置 (a lower position for the subject) にあることを示す現象であるとの指摘がなされている。

3. 文体的倒置と複数の助動詞 (stylistic inversion and multiple auxiliaries)

3.1. 分詞前置 (participle preposing)：Samko 2014

分詞前置 (participle preposing) とは，(17) の太字体で表わされた進行あるいは受動の beの補部が beの左側に生じる構文である。(cf. Emonds 1976, Rochemont 1978, Rochemont and Culicover 1990)

(17) **Jutting down from his long, graying locks** *were* his ever-present giant sideburns, each shaped like the state of Idaho. (Samko 2014: 371)

Samko (2014) では，分詞前置は根節 (root clauses) や橋渡し動詞 (bridge verbs) の補部にのみ生じ，談話の親密性 (discourse-familiarity) 制約に従うことが指摘されている。

Samko (2014) では，分詞前置の派生において，一番高い動詞句 (the highest available *v*P) が TP の指定辞に A 移動 (A-movement) すると分析されている。[2]

(18) a. **Being tried separately from Koike** *are* Nomura and three former executives.

b.*Tried separately from Koike are being Nomura and three former executives.

c.*Tried separately from Koike are Nomura and three former executives being. (Samko 2014: 371–372)

(18) の文法性から，一番高い動詞句が移動しなければならないことがわかる。(18) では，進行の be (progressive be) と受動の be (passive be) が共起する時，より大きな進行の分詞 (progressive participle) のみの前置が許容される。移動する要素は being と tried を含む動詞句でなければならないことから，Samko (2014: 372) では，構造 (19) が提案されている。

---

[2] 前置される分詞が TP の指定辞に移動する証拠として，Samko (2014: 372) では，(i) 通常の主語と生起できない，(ii) 上昇述語 (raising predicates) とともに生じ主節の主語位置にある，(iii-iv) 付加疑問文 (tag questions) において，通常の主語ではなく，there となるという点が指摘されている。

(i) Preverbal canonical subject

a.***Undermining Abbey's confidence** the decline in value of Lloyds' shares *was*.

b.*The decline in value of Lloyds' shares **undermining Abbey's confidence** *was*.

(ii) Raising

Undermining Abbey's confidence seemed to *be* the decline in value of Lloyds' shares.

(iii) Tag-questions

a. ***Surrounding the stricken president** *are* power brokers, aren't they.

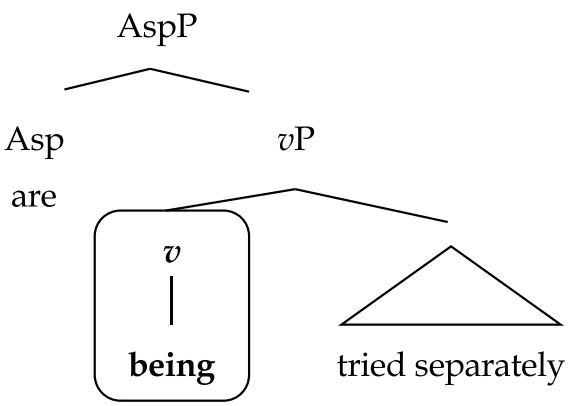
b. %**Surrounding the stricken president** *are* some power brokers, aren't there.

cf. (i) **Leaning against a lamppost** (there) *was* a lonely figure of a man. (Bolinger 1977: 95)

(iv) **Around the stricken president** *are* some power brokers, aren't there.

cf. (i) There's time, isn't there? (Bolinger 1977: 90)

(19)



Samko (2014: 373) では，beは小節 (small clause) 補部，すなわち，PredPを取り，その主要部 Pred には EPP特性 (EPP property) があるとする分析が提案されている。この EPP特性が，(20) に見られる部分的上昇 (partial raisings) に説明を与えることになる。

(20) a. There was *a top executive* examined today.
b. There is *a long list of prospects* being discussed.

(20) では，目的語位置にあった主語が受動 there構文において上昇すると分析されている。Beが小節を補部に取るとする分析から，通常の語順の文と分詞が前置される文との派生の違いは，次のようになる。通常の語順の文では，動詞句内にある主語 (*v*P-internal subject) が PredPの指定辞に，その後 TPの指定辞に移動する。一致 (agreement) は TPの指定辞にある主語と成される。他方，分詞が前置される文では，通常の主語が PredPの指定辞に移動する。次に，動詞句 (*v*P) が TPの指定辞に，その後 CPの指定辞に移動する。[3] Samko (2014) が仮定する節構造は，CP > TP > AspP > PredP > *v*P > VP である。この提案に基づくと，(21a) は，(21b) に示された派生により導かれることになる。

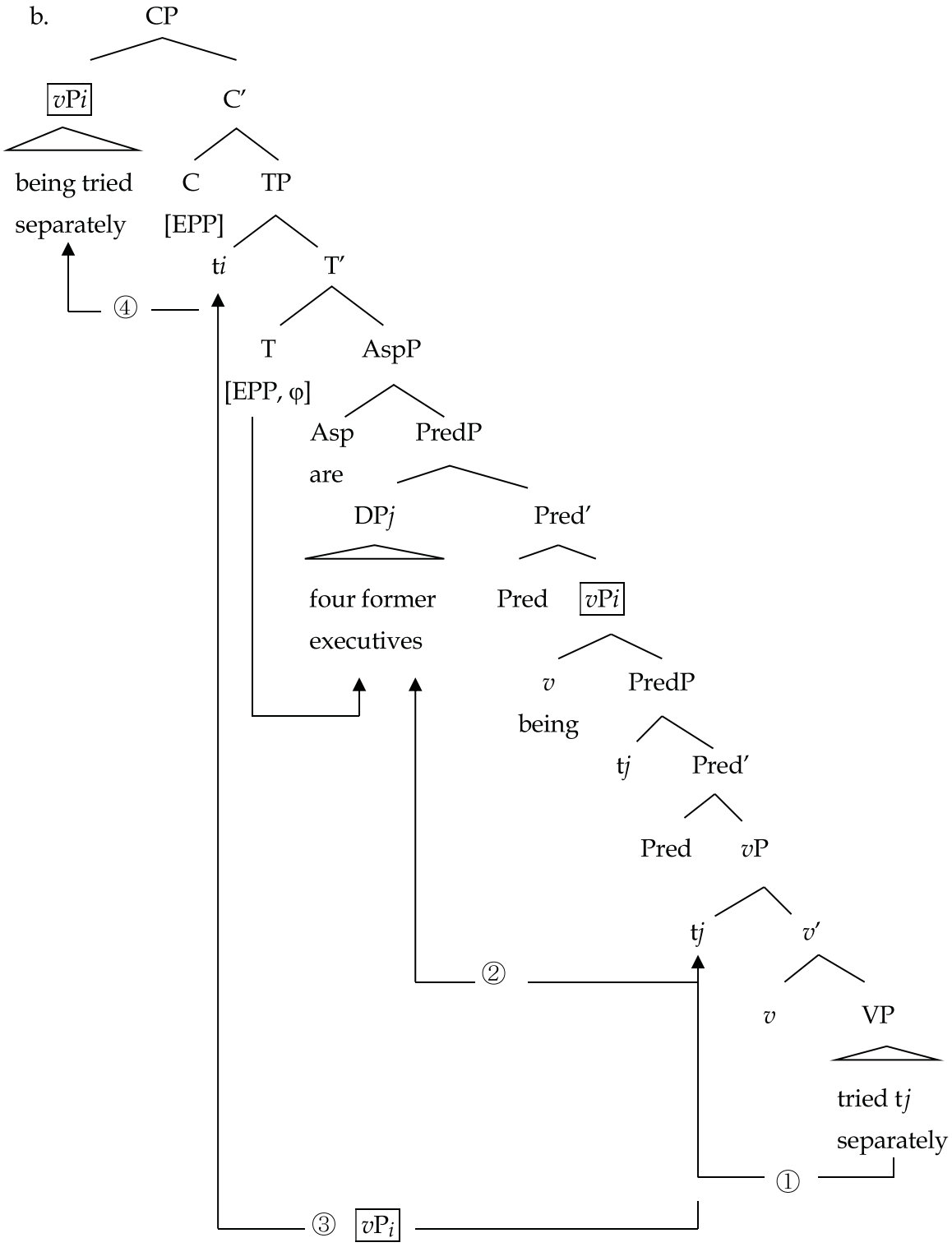
[3] Samko (2014: 373) では，分詞は CPの指定辞に A'移動すると分析されている。証拠は，次の (i) の非文法性が示しているように，疑問文や話題化の A'移動が許されないからである。

(i) a.*When$_i$ *were* **leading the group down** Bombardier Inc. shares t$_i$? [constituent questions]
b.*Jeff Maggert, **leading the way** *is*. [topicalization]
c.**Was* **softening the blow** the fact that Mirror Group's cable television account was one of the four pieces of business? [polar questions]

前置された分詞が CPの指定辞の位置にあれば，そこを経由しての移動が阻止されることになり，(i) が非文法的であることに説明を与えることができると主張する。

(21) a. **Being tried separately** *are* four former executives. (Samko 2014: 375)

b.



Samko (2014: 375) は，提案されている分析は，分詞前置と存在文 (existential constructions) の類似性を際立たせ，(22) は基底構造を共有し，異なる派生過程を経て導かれることになると主張する。

(22) a. A new fund managed by James D. Oberweis is sitting atop the list.

b. There *was* a new fund managed by James D. Oberweis **sitting atop the list**.

c. **Sitting atop the list** *is* a new fund managed by James D. Oberweis. (Samko 2014: 375)

(22) の違いは，語彙項目として冗語 (expletive) が選択されているかどうかと T の素性特性の違いによるとの分析が提案されている。すなわち，C には TOP (IC) 素性があり，この素性を T と共有する。この際，EPP と TOP がともに T に具現し，この T が TOP 標示される句を指定辞に牽引 (attract) することになると提案されている。更なる CP の指定辞への移動は，C の TOP 素性と EPP による牽引の結果であるとの分析が提案されている。[4]

3.2. 倒置を伴う as 挿入節 (inverting *as*-parentheticals)：Potts 2002, LaCara 2015

LaCara (2015: 219) では，倒置を伴う as 挿入節 (inverting *as*-parentheticals) のうちで，次の (23) に見られるような，述語が欠けている (some predicate-denoting phrase goes missing) 述語 as 挿入節 (predicate *as*-parentheticals) が取り上げられている。

(23) a. Harvey will kiss a pig, as *will* Mary.

b. Harvey has bought a farm, as *has* Mary.

この述語 as 挿入節では，(24) で示されているように，複数の助動詞が主語に先行することができ，主語と助動詞の倒置 (SAI) で導くことはできない。

(24) a. The US trade deficit could be an issue, as *could be* the fact that much of China's economy is still fueled by exports. (LaCara 2015: 220)

b. By the end of the trip, Klaus will have seen many bats, as *will have* Eddie.[5] (Potts 2002: 640)

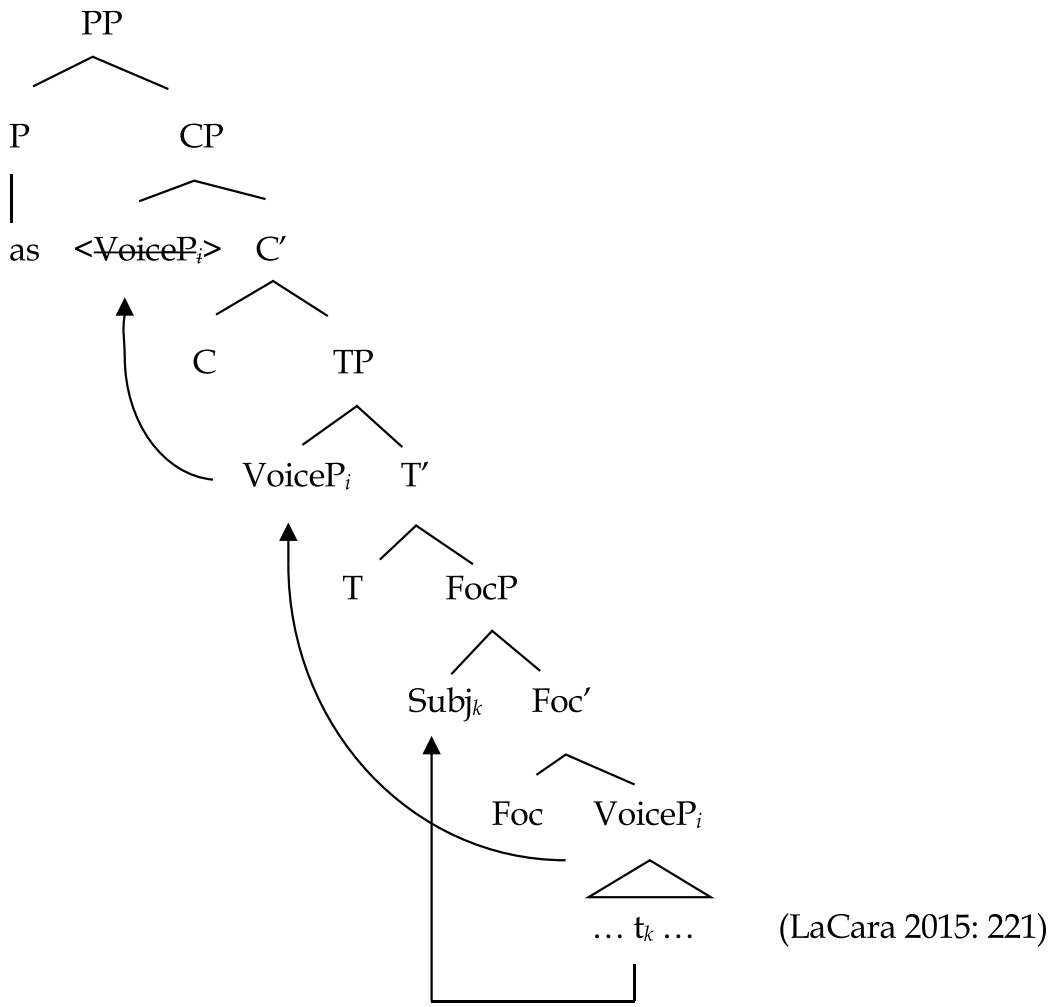
---

[4] Samko (2014) は，(21) の構造からわかるように，C にも EPP 素性があると仮定している。すなわち，Samko (2014: 377) では，主要部 C には [TOP, EPP] が，T には [TOP, EPP, j] が指定されている。しかしながら，T の EPP 素性は，前置される分詞が A 移動の特性を示すことを保証するための (21) の ③ において vP_i を牽引するための素性であり，この動詞句を CP の指定辞に牽引する素性は TOP であるとすべきであるように思われる。

[5] この (24b) は，Potts が査読者との議論の過程で示された例文 (Potts 2002: 640, 注 8) である。主語が重いことにより，転移 (heavy shift) が適用されているのではないかとの指摘に対して，査読者の指摘を支持する証拠であるとして，(24b) が示されている。Potts (2002) では，複数の助動詞と主語との間で倒置が起こるという事実に関心が向けられていない。Potts (2002: 639) では，比較節と述語 as 挿入節において，主語と助動詞 do との随意的な倒置 (optional inversion) があり，同じ制約に従うとの指摘がなされている。同じ制約に従うとして指摘されている現象が，次の (i) である。

主語が複数の助動詞の後に生じるということは，TPの指定辞にはないことを示し，主語は焦点 (focus) が付与される TPの中間的な位置 (a middle field) にあり，動詞句 (the verb phrase *v*P) が TPの指定辞から CPの指定辞へと移動し，比較節削除 (comparative deletion) により，最終的に削除されるとする分析が LaCara (2015: 220) では提案されている。その構造は，次の (25) である。

(25)



(LaCara 2015: 221)

Potts (2002) では，as挿入節内の空所は統語的に空な動詞句の代用形 (a syntactically empty VP pro-form) の移動により派生されるもので，動詞句削除 (verb phrase ellipsis: VPE) によるものではないと

(i) a. Buzz has been flying longer than *has* Chuck (*been (flying)).

b. By the end of the trip, Klaus will have seen many bats, as *will* Eddie (*have (seen)).

助動詞 willと主語 Eddieが倒置されている (ib) が非文法的で，複数の助動詞 will have と主語が倒置されている (24b) は文法的であるということについては，何ら説明が与えられていない。

し，移動に基づく分析が提案されている。

(26) a.*Nina quickly bought two durians, exactly as we met **a chef who did**.
b. Nina quickly bought two durians, and we met **a chef who also did**. (LaCara 2015: 223)

(26a) は as 挿入節で，(26b) は VPE である。ゴシック体で表示されている箇所は，複合名詞句 (complex noun phrase) を成し，移動にとっての島 (islands) となる。VPE が関わる (26b) が文法的で，as 挿入節が関わる (26a) が非文法的であるということは，as 挿入節の派生には，削除ではなく，移動が関わっているからであると Potts (2002) は主張する。[6]

Potts (2002) の as 挿入節に対する移動分析に対して，LaCara (2015) は，移動と削除に基づく分析を提案する。第一に，(27) で示されているように，動詞が残留する VPE がある。

(27) The FAA has a similar duty in the USA, as have equivalent organizations in almost every country throughout the world. [British English] (BNC CN2 770) (LaCara 2015: 225)

第二に，主語がその外側に移動する動詞句 (a silent VP out of which the subjects moved) を仮定しなければならない (28) のような現象がある。

(28) a. The ship sank, as *will* the barge. [unaccusative]
b. The ship was sank, as *was* the barge. [passive]
c. Mary seems to be happy, as *does* Bill. [raising] (LaCara 2015: 225)

(28) の主語は，本来は外項 (external arguments) ではなく，内項 (internal arguments) だからである。[7]

倒置を伴う as 挿入節の特性をまとめると，次の (29) となる。

---

[6] As 挿入節と VPE の違いとして，先行詞に課される局所性の違いが指摘されている。

(i) The fact that Sue **read the map carefully** probably means that she **stayed on the trails**, as *did* Chuck.
a. stay on the trails b. *read the map carefully (LaCara 2015: 224)

VPE とは異なり，複合名詞句内の動詞句を as 挿入節の先行詞とすることはできない。

[7] 削除分析を支持する現象として，VPE と同様に，言語学的先行詞を必要とすること，通常，文脈から先行詞を選び出すことができないことに関しては，LaCara (2015: 226–227) を参照。

(29) Properties of inverting *as*-parentheticals

a. The subjects of inverting *as*-parentheticals appear after auxiliaries.

b. Multiple auxiliaries precede their logical subjects. Subjects are not in SpecTP in *as*-parentheticals.

c. Expletive subjects are completely banned from inverting *as*-parentheticals. Subjects are not in SpecTP.

d. Subjects must leave Spec*v*P and move out of VoiceP.

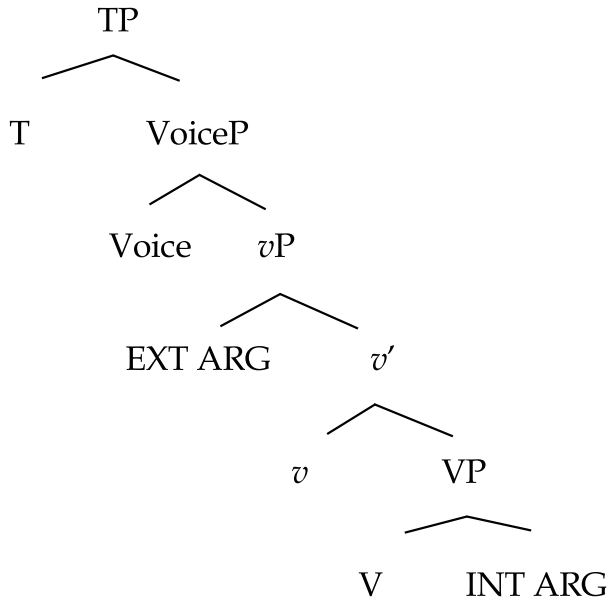
(29c) に関しては，次の (30) から明らかである。冗語の there や it は as 挿入節に生じることはできない。

(30) a.*There might be a show tomorrow, as *might (be)* <u>there</u> on Friday.

b.*It will rain tonight, as *will* <u>it</u> tomorrow. (LaCara 2015: 231)

Merchant (2013) は，態 (voice) と項構造 (argument structure) における空所と先行詞のミスマッチに関わる事実を説明するために，分離動詞句 (a split *v*P) を仮定する。次の (31) で示されているように，v^0 の態及び項構造の特性を分離する構造を仮定する。*v*P は多動性 (transitivity) に対応し，外項 (EXT ARG) を導入する。この句が VoiceP に支配され，節の態を決定する。

(31)



LaCara (2015: 235–236) によれば，倒置を伴う as 挿入節では，態のミスマッチ (voice mismatch) (32) 及び項構造のミスマッチ (argument structure mismatch) (33) は許されない。

(32) a.*The janitor should remove those bins, as *should be* the others.

b.*I haven't implemented the system with a manager, as *will be* it.

c.*It should be noted, as *does* Dennett, that freshmen are often foolish.

d.*The system can be used by anybody, as *have* you. (LaCara 2014: 236)

(33) a.*John closed the door, as *did* the window.

b.*The door closed, as *did* John. (LaCara 2014: 236)

この事実から，LaCara (2015: 236) は，倒置を伴う as挿入節では，*v*Pではなく，VoicePがマッチしていなければならないことを指摘し，主語が VoicePから焦点化される位置に移動するとの分析が提案されている。

倒置を伴う as挿入節の特性 (29) を共有する構文として，談話倒置 (discourse inversion) があり，この構文に，分詞前置 (participle preposing) が含まれる。LaCara (2015: 237) は，異なる特性を有するものの，分詞前置や所格倒置 (locative inversion) と同様の派生過程を仮定することで，倒置を伴う as挿入節の特性に説明を与えることができると主張する。分詞前置と倒置を伴う as挿入節の類似点の一つとして，LaCara (2015: 238) では，主語が複数の助動詞の後に生じるという特性が指摘されている。[8]

(34) a. The mayor will be speaking tonight, as *will be* the Chancellor.

b.*The mayor will be speaking tonight, as *will* the Chancellor *be*.

(35) a. Speaking tonight *will be* the Chancellor.

b.*Speaking tonight *will* the Chancellor *be*.

類似点の二つ目として，LaCara (2015: 238) では，助動詞に後続する主語には，焦点強勢 (focal stress) が与えられなければならないことが指摘されている。

(36) a. Mary kissed a pig, as *will* YOU.

b. *Mary wants to kiss a pig, as *WILL* she.

(37) a. Speaking tonight *is* THE CHANCELLOR.

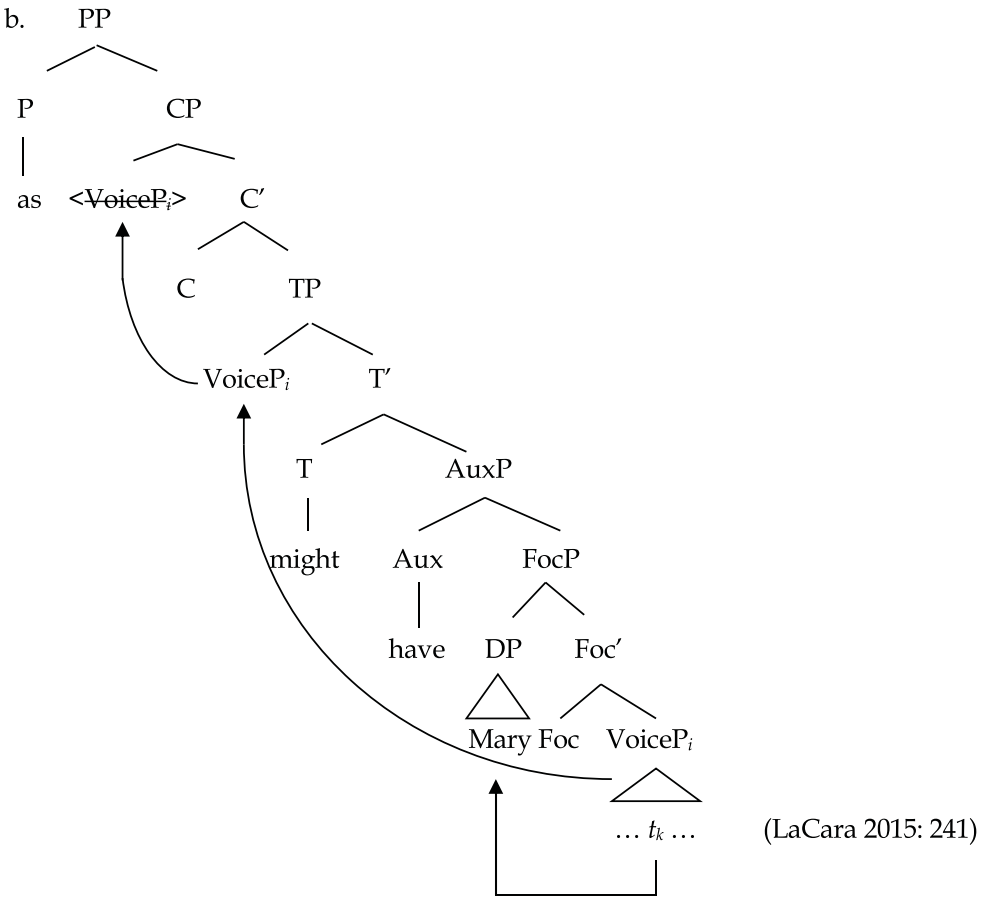
b.??Speaking tonight *IS* the chancellor.

これまでの議論をまとめると，倒置を伴う as挿入節の派生過程は，次の (38) となる。

[8] (34b) や (35b) が，LaCara (2015) では，何故，非文法的であるかに関しては，何ら説明が与えられていない。

(38) a. ... as *might have* Mary

b.



(LaCara 2015: 241)

談話倒置構文として，分詞前置や所格倒置や倒置を伴う as 挿入節があり，異なる諸特性とともに，共有されている特性も多々あることが指摘され，統一的な分析が提案されることが有益であることが指摘されている。

3.3. 比較倒置 (comparative inversion) : Park 2012

Park (2012) では，英語の比較倒置 (English comparative inversion: CI) に対して，HPSG に基づく分析が提案されている。Park (2012) は，Culicover and Winkler (2008) が指摘する CI では主語が複数の助動詞に後続することが許されるとする現象に着目し，通常の SAI で分析される倒置とは異なる現象であることを指摘している。

(39) a. Who was responsible for keeping the records would be a more reliable witness as to their accuracy as a whole than *would be* any of the original makers.

b. To her, thinking, as she ever was thinking, about Johnny Eames, Siph was much more agreeable than *might have been* a youngster man who would have endeavored to make her think about himself. (Culicover and Winkler 2008: 630)

Park (2012: 312) は，(40) を例にとり，CIは重名詞句転移 (heavy NP shift: HNPS) が適用されて導かれるわけではないことを指摘している。

(40) a. Ali would have driven a car to the park more eagerly than *would have* the students (in our class on environmental consciousness) **to the concert**. (Potts 2002)

b. Jim would have translated the English much better than *would have* students in his class **read the Spanish**.

c. John could have read French more fluently than *could have* Joe.

CIがHNPSが適用されて導かれているのではないことは，(40a) では前置詞句 to the concert が，(40b) では動詞句 read the Spanishが後続し，(40c) の主語は1語の固有名詞だからである。

Park (2012: 317) では，SAIが適用されて倒置が生じる現象と異なり，CIでは主語が複数の助動詞に後続することが許され，更に，(41b) に見られるように，後続する主語には，対照的で焦点を担う意味を有する句 (the phrase with contrastive focus meaning) spoken Englishが，その後に続くことが許されることが指摘されている。[9]

---

[9] Park (2012: 326) では，nor 節において，SAIが適用される (i) の場合と，焦点の意味を伴う主語であれば，(ii) のように，複数の助動詞の後に生じることができることが指摘されている。

(i) a. Our man from Pernambuco had no inkling of this treachery, nor *would* he have given it his approval. (COCA)

b. Edict 1 had been passed so long ago that most citizens of Spyre did not even know it existed, nor *would* they have understood its significance if it were described to them. (COCA)

(ii) a. A minor brawl between Arabs and Jews would have been nothing, **nor** *would have been* Israeli Arab demonstrators clashing with police in Arab townships, or Jewish settlers and Palestinians attacking each other's persons and property in the occupied territories. (COCA)

b. This harassment used the mechanisms provided by the research ethics industry on campus, and it seems likely that a private therapist would not have been such an easy target, **nor** *would have* a journalist. (BNC)

Park (2012: 327) では，さらに，as倒置やso倒置にも，同様のことがあてはまることが指摘されている。

(iii) a. Blair fell down the stairs, as *did* her brother.

b. John made his hair cut, and so *did* Tom. (cf. Culicover and Winkler 2008)

(iv) a. Jane had been there, and **so** *had been* her boy friend.

b. Sandy would have been very angry, **as** *would have been* all of the people who invested in the project. (Culicover and Winkler 2008: 652)

(41) a. Megan can jump higher than *could have* Bill.

b. John read French more fluently than *could have* Joe **spoken English**.

(Culicover and Winkler 2008: 647)

Park (2012: 323) では，*inv-focus-cl* により，比較節に2つの助動詞が生じる時，(42) に見られるように，その主語が2番目の助動詞と助動詞ではない動詞句の間に生じることが許されることを指摘している。

(42) a. John might have eaten cookies faster than *might have* Paul **made**.

b. Mike wrote more books than *would have* John **read**. (Park 2012: 323)

4. 存在文と複数の助動詞 (existential sentences and multiple auxiliaries)

4.1. 周辺的存在文 (periphrastic existential sentences) : Milsark 1974, Harwood 2013, Aelbrecht and Harwood 2014, Samko 2014

Milsark (1974: 155) では，周辺的存在文 (周辺的 ES) の構造 (structural definition) は (43) であると仮定されている。

(43) **Periphrastic ES**

Structural definition:

$$[_{S}\ \textit{there} - \text{AUX} - \textit{be} - \text{NP} - [_{VP} \left\{ \begin{array}{c} \text{V-}\textit{ing} - \text{X} \\ \text{V-}\textit{en} - \text{X} \\ [_{PRED}\ \text{AP}] \end{array} \right\}] - \text{Y}]$$

周辺的 ES では，意味上の主語名詞句に動詞句が後続するとの分析が提案されている。この周辺的 ES の特性として，(44–47) の事実が指摘されている。

(44) a. There *has been* a lot **accomplished**.

b. There *were* several people **talking**. (Milsark 1974: 9)

(45) a. There *used to be* a lot **going on**.

b. There *has been* a man **shot** (by a maniac). (Milsark 1974: 14)

(46) a. A lot was being accomplished.

b.*There *was* **being** a lot **accomplished**. (Milsark 1974: 23)

cf. There *was* a lot **being accomplished**.

(47) a. *There *were* **being** many people **silly**.

b. There *were* many people **being silly**. (Milsark 1974: 31)

(44–45) から明らかなように，周辺的 ES の意味上の主語に，現在分詞や過去分詞が後続することができる。(46–47) から明らかなように，現在分詞 being は意味上の主語に必ず後続しなければならない。現在分詞 being が意味上の主語に後続しなければならないことは，there 挿入 (*there* insertion) に課される the leftmost *be* restriction として規定されている。この制約では，SD の項目 4 を満たすために，一番左側にある be が選ばれなければならない (the leftmost occurrence of *be* in the sentence under the analysis by the rule is chosen to fulfill term 4 of the structural description) と規定されている。

(48) *There* insertion

SD:	X	NP	Y	*be*	Z	SC:	1	*there*	3	4	2	5
	1	2	3	4	5							

(Milsark 1974: 158)

さもないと，非文法的な (49a) が導かれることになる。

(49) a.*There *was* **being** a house **built**. (Milsark 1974: 160)

b. There *was* a house **being built**.

他方，(49b) は，一番左側にある be が項目 4 の位置にあるので，文法的である。Milsark (1974: 160) が指摘しているように，この制約を仮定することのない存在文の分析が望まれる。何故，There was being a house built. は非文法的なのか，原理だった説明が必要である。

4.2. 上昇述語としての be (*be* as a raising predicate) : Stowell 1978, Heggie 1988, Samko 2014

Stowell (1978: 463) では，there 存在文において，半法助動詞 (semi-modals) の be to や be going to の be を超えて主語名詞句が移動することができない (the “subject” NP can never move around *be* in the “semi-modals” *be to* and *be going to*.) とする半法助動詞制約 (the semi-modal restriction) が指摘されている。

(50) a.*There *are* three children *to* **write the test tomorrow**.

b.*There *are* some classy dames *going to* **come with us**.

(51) a. There *are to be* three children **admitted to class today**.

b. There *are going to be* some classy dames **coming along**.

(50) とは異なり，(51) では，半法助動詞 be to や be going to がひとまとまりとなり，文法的である。

また，Stowell (1978: 463–464) では，the Leftmost *be* Restriction に関して，(52–53) で示されているように，主語名詞句は一番左側の進行の beの右側に生じなければならない (the NP must appear to the right of the leftmost (progressive) *be*.) ことが指摘されている。[10]

(52) a.*There *are* **being** some houses **built**.

b.*There *is* **being** a man **sick outside**.

(53) a. There *are* some houses **being built**.

b. There *is* a man **being sick**.

(54) a. *There *are* **being** some children **scolded**.

b. *There *are* **being** two customers **helped at the counter**. (Heggie 1988: 28)

(55) a. There *are* some children **being scolded**.

b. There *are* two customers **being helped at the counter**. (Heggie 1988: 28)

(52) と (54) は，the leftmost *be* restriction に違反し，being が主語名詞句の左側にあるので，非文法的である。

このような there 存在文の現象に対して，Stowell (1978: 465) は，beは他動詞で，目的語の名詞句や名詞句に後続する形容詞句や前置詞句や現在分詞補部に下位範疇化され，状況や出来事として解釈される (*be* as a transitive verb, subcategorized for an “object” NP, or NP followed by an AP, PP, or *ing*-verbal complement, and interpreted as a situation or event)，また，名詞句に後続する要素は名詞句の属性を表わし，その名詞句はあたかも主語であるかのようである (the second constituent is attributed to the NP, as if the NP were its “subject”) と分析され，Stowell (1978: 465–466) では，beを上昇述語とする分析が提案されている。D構造において，語彙挿入 (lexical insertion) が随意的であるとするならば，(56a) に対して (56b) のような D構造を仮定することができると主張する。すなわち，an angry lion に Move α が適用されて，(56c) が導かれるとする分析である。

[10] McCawley (1988: 240) でも，同様の事実が指摘されている。

(i) a. There *was* someone **killed**. (passive *be*)

b. There *were* several dogs **barking**. (progressive *be*)

(ii) a. There *was* a man **being tortured**.

a'.*There *was* **being** a man **tortured**.

b. There *was* someone **being obnoxious**.

b'.*There *was* **being** someone **obnoxious**. (McCawley 1988: 240)

(56) a. An angry lion has been running wild.

b. [*e*] has been [$_{NP}$ an angry lion] [running wild].

c. [$_{NP}$ An angry lion] has been [$_{NP}$ *t*] [running wild].

すなわち，(56a) の基底構造は (56b) で，空いている NP 位置 [*e*] (an unfilled NP) に，名詞句が移動することで，(56a) が導かれるという分析である。

他の上昇述語と同様に，(57) で示されているように，連続循環的に (successive-cyclically) 名詞句が TP の指定辞に移動する。

(57) a. [*e*] hasn't been [*e*] being [John] [cruel]

b. [*e*] hasn't been [John] being [*t*] [cruel]

c. [John] hasn't been [*t*] being [*t*] [cruel] (Stowell 1978: 466)

There 存在文の派生において，意味上の主語が一度だけ移動し，(58c) に示されているように，TP の指定辞に there が挿入される。[11]

(58) a. [*e*] was [*e*] being [a man] [nasty to me]

b. [*e*] was [a man] being [*t*] [nasty to me]

c. [There] *was* [<u>a man</u>] **being** [*t*] [**nasty to me**] (Stowell 1978: 466)

これが，Stowell (1978) が提案する there 存在文の派生である。The leftmost *be* restriction に関しては，NP 移動に課される一般的な制約により説明を与えることができると主張する。

(59) [*e*] was [*e*] being [a man] [nasty to me]

(60) a.*There *was* **being** <u>a man</u> **nasty to me**.

b. [there] *was* [*e*] **being** [<u>a man</u>] [**nasty to me**] (Stowell 1978: 468)

すなわち，Stowell (1978) によれば，(60a) が非文法的なのは，NP 位置を空いたままにしておくことができないにもかかわらず，(60b) では空いたままの NP 位置があることに求められる。

---

[11] There 挿入 (*there*-insertion) に課される制約は，名詞句移動に別個に必要とされる制約であると主張されている。

(i) No NP generated by the base may remain unfilled at the surface; it must be filled either by lexical material, by trace, or by a "designated element" inserted by rules such as (5) [= *there*-insertion]. (Stowell 1978: 466–467)

5. 倒置文と存在文：小節分析 (small clause analysis): Stowell 1978, Heggie 1988, Moro 1997, 2000, Dikken 2006, Samko 2014, LaCara 2015

第2節では，2種類の英語倒置文，第3節では文体的倒置と複数の助動詞，第4節では存在文と複数の助動詞に焦点をあて，倒置文は異なる2種類の倒置文に峻別されなければならないことを，先行研究に基づき，明らかにした。もしこの分析が正しいとするならば，Huddleston and Pullum (2002) の分析，すなわち，1) 倒置文に主語後置との類似性がある，2) 主語と助動詞の倒置との類似性もあることから，比較節内の倒置を伴う構文は，1) 主語後置と2) 主語と助動詞の倒置を混ぜ合わせたような特徴を有する構文であるとの分析は再考が求められることになる。

本稿では，上昇述語としてのbeに基づく分析 (cf. Stowell 1978, Heggie 1988, Moro1997, 2000, Dikken 2006, Samko 2014, LaCara 2015) を仮定し，複数の助動詞を伴う倒置文と存在文の基底構造は，小節構造を内包する (61a) であると主張する。[12] 小節は，主部 (subjects) と述部 (predicates) で構成され，その述部は，(61b) に示された語彙的動詞 (lexical verbs) であり，この中に beingや V-ingや V-enが含まれると主張する。[13]

(61) a. [*e*] TENSE (modal) (have) (be) [$_{\text{small clause}}$ **Subjects + Predicates**]

b. **Predicates: lexical verbs, *being*, V-*ing*, and V-*en***

(61a) で示されているように，小節の主語に先行するのは，本稿では，節点 T に支配される助動詞であると主張する。すなわち，(61a) の主語は空いている NP位置 [*e*]であり，主部と述部から成る小節を助動詞が選択する構造を持つとする分析を小節分析と呼ぶことにする。この分析は，(62) に示されている助動詞の固定された順番に依っている。

(62) a. Betsy must have been being hassled.

b. finite modal > perfect *have* > progressive *be* > passive *be* > lexical verb

(cf. Aelbrecht and Harwood 2015)

---

[12] 本稿では，小節が具体的にどのような統語範疇が主要部を成すのかに関しては，問わないことにする。また，beは上昇述語であるとの分析を仮定するが，小節を選択する主節の beは，述語としての助動詞である。この分析は，動詞の beと助動詞の beがあり，語彙的に区別されると主張する Williams (1984) や Kaga (1985) の分析に基づくものである。従って，be が V から T に移動する操作 (cf. Kayne and Pollock (1978), Roberts (1998)) は仮定しない。2種類の be については，Akmajian and Wasow (1975), Akmajian, Steele, and Wasow (1979), Williams (1984), Kaga (1985), Huddleston and Pullum (2002), Harwood (2013), Bošković (2014), 木村 (2015a, 2015b, 2016a, 2016b, 2016c, 2016d, 2018, 2021), Aelbrecht and Harwood (2015) 等を参照。

[13] Being が語彙的動詞であるとする分析については，Fabb (1983), 有元 (1988), Samko (2014), Ramchand and Svenonius (2014), Ramchand (2018), 木村 (2016b, 2018, 2021) を参照。

本稿の分析によれば，(61) から明らかなように，語彙的動詞や beingや V-ingや V-enを述語とする小節が，主節の述語である助動詞に選択されることになる。[14] ここでの分析に従うと，(61a) を基底構造とする文には，その派生過程が異なる3種類の文が存在することになる。小節の主部が主節の主語位置に上昇することにより導かれる文がある。例えば，(56a) や (57c) 等の通常の文である。第2に，小節の述部が主節の主語位置に上昇することにより導かれる文がある。これが，文体的倒置文である。第3に，Chomsky (2013, 2015) の Labeling algorithm により，小節の主語は，本来の位置より高い位置に移動するが，主節の主語位置まで移動することがない。この時，空の主語位置を埋めるのが，thereである。このようにして，存在文が導かれることになる。Huddleston and Pullum (2002) の分析とは異なり，主語は一貫して高い位置に移動するのみである。後置されることはないというのが，本稿の分析である。

本稿の注5で，例文 (24b) は，Potts (2002) が査読者との議論の過程で示された例文であり，主語が重いことにより，転移が適用されているのではないかとの査読者の指摘を支持する証拠として提出された例文であることを紹介した。(24b) を (63) として採録する。

(63) (= (24b)) By the end of the trip, Klaus will have seen many bats, as *will have* Eddie.

Potts (2002) では，複数の助動詞と主語との間で倒置が起こるという現象に関心が向けられておらず，比較節と述語 as挿入節において，主語と助動詞 doとの随意的な倒置 (optional inversion) があり，同じ制約に従うとの指摘がなされ，示された現象が本稿の註5の (ia) であった。(ia) を (64) として採録する。

(64) (= (ia)) a. Buzz has been flying longer than *has* Chuck (*been (flying)).
b. By the end of the trip, Klaus will have seen many bats, as *will* Eddie (*have (seen)).

助動詞 willと主語 Eddieが倒置されている (64) (= (ia)) が非文法的で，複数の助動詞 will have と主語が倒置されている (63) (= (24b)) が文法的であるという点については，何ら説明が与えられていないことを指摘した。この問題に対して，本稿の分析，すなわち，(61a) を基底構造として仮定する小節分析に基づくと，適切な説明をすることができることを以下に示す。(63)と (64)の文法性の違いを，(63) の as will have Eddieと (64) の than has Chuck been flying と as will Eddie have seen の記号列を本稿の表記法で表わした (65) に基づき考えてみることにする。

[14] 動詞句削除に基づく一般化 (Non-finite *have* always stays overt, *being* is obligatorily elided, and *be* and *been* are optionally elided. (Aelbrecht and Harwood (2015: 66), cf. Akmajian and Wasow (1975), Sag 1976)) に基づき，beingが語彙的動詞で，have や beenは助動詞であるとする分析に関しては，木村 (2016b, 2016c, 2018) を参照。

(65) a. as *will have* Eddie **seen many bats**

b. *than *has* Chuck *been* **flying**

c. *as *will* Eddie *have* **seen many bats**

(65a, b, c) の記号列を (61) と照らし合わせた時，(65a) が文法的であるにもかかわらず，(65b, c) が非文法的である理由は一目瞭然である。(65a) では，Eddie seen many bats が (61b) の述部の基底に合致しているので文法的なのである。その一方で，(65b) の has Chuck been flying や will Eddie have seen many bats には (61b) で規定されている語彙的動詞で構成されるべき述部に助動詞が含まれている。これが，(64) が非文法的な理由であると，本稿の小節分析に基づく分析では，説明を与えることができる。

次に，Milsark (1974) が指摘する現象，すなわち，周辺的 ES では意味上の主語名詞句に動詞句が後続するという現象を，本稿の小節分析のもとで，考察することにする。(46–47) を (66–67) として採録する。

(66) (= (46)) a. *There *was* **being** a lot **accomplished**.

b. There *was* a lot **being accomplished**.

(67) (= (47)) a. *There *were* **being** many people **silly**.

b. There *were* many people **being silly**.

(61b) に従うと，現在分詞 being は意味上の主語に必ず後続しなければならない。このことは，there 挿入に課される the leftmost *be* restriction として規定されている現象である。Milsark (1974: 160) が指摘しているように，この制約を仮定することのない存在文の分析が望まれ，何故，There was being a house built. が非文法的なのか，原理だった説明を与える必要があることが指摘されている。この問題に対して，本稿の分析，すなわち，(61a) を基底構造と仮定する小節分析に基づくと，適切な説明をすることができることを次に示す。(66) と (67) の文法性の違いを，(66a) の was being a lot accomplished と (66b) の was a lot being accomplished と (67a) の were being many people silly と (67b) の were many people being silly の記号列を本稿の表記法で表わした (68) に基づき考えてみることにする。

(68) a. **were* **being** a lot **accomplished**

b. *were* a lot **being accomplished**

c. **were* **being** many people **silly**

d. *were* many people **being silly**

(68a, b, c) の記号列を (61) と照らし合わせた時，(65b) と (68d)が文法的であるにもかかわらず，(68a) と (68c) が非文法的である理由は一目瞭然である。(65b) と (68d) では，were a lot being accomplished と were man people being sillyが (61b) に合致しているので文法的なのである。その一方で，(68a) と (68c) の were being a lot accomplished や were being many people silly が (61b) で規定されている語彙的動詞のみで構成されるべき述部ではなく助動詞を含んでいる。これが，(66a) と (67a) が非文法的な理由であると，本稿の小節分析に基づく分析では，説明を与えることができる。

6. 結論

本稿では，主語後置と主語と助動詞の倒置とを混ぜ合わせたような特徴を有する構文があると主張する Huddleston and Pullum (2002) の分析を批判的に検証し，2種類の異なる倒置文，すなわち，1) SAI が関わる倒置文と 2) SAIが関わらない倒置文が存在することを明らかにした。1) 主語と助動詞が倒置する T to C主要部移動が関わる倒置文と 2) 複数の助動詞に主語が後続する倒置文である。後者の倒置文は，T to C主要部移動で分析することのできない倒置文である。(Culicover and Winkler 2008, Samko 2014, Brueing 2015)

本稿では，上昇述語としての beに基づく分析を仮定し，複数の助動詞を伴う倒置文の基底構造は，小節構造を含む (69a) (= (61a)) であるとする分析を提案した。

(69) (= (61)) a. [*e*] TENSE (modal) (have) (be) **[$_{\text{small clause}}$ Subjects + Predicates]**

b. **Predicates: lexical verbs, *being*, V-*ing*, and V-*en***

すなわち，小節の主語に先行するのは，Tに支配される助動詞である。本稿では，基底構造では，主語は空いている NP位置 [*e*] であり，主部と語彙的動詞の述部から成る小節を助動詞が選択する構造を持つとする小節分析を提案し，その妥当性を検証した。

参考文献

Aelbrecht, Lobke, and William Harwood. 2015. To be or not to be elided: VP Ellipsis Revisited. *Lingua* 153 (2015) 66–97.

Akmajian, Adrian, Susan Steele, and Thomas Wasow. 1979. The Category AUX in Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 10:1, 1–64.

Akmajian, Adrian, and Thomas Wasow. 1975. The Constituent Structure of VP and AUX and the Position of the Verb *Be*. *Linguistic Analysis* 1:3, 205–245.

有元將剛 1988.「英語助動詞の構造」『英文学研究』第64巻第2号 245–263.

Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.

Bošković, Željko. 2014. Now I'm a Phase, Now I'm Not a Phase: On the Variability of Phases with Extraction and Ellipsis. *Linguistic Inquiry* 45:1, 27–89.

Brueing, Benjamin. 2015. Subject Auxiliary Inversion. (to appear in *Syncom*.)

Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam. 2013. Problems of Projection. *Lingua* 130, 33–49.

Chomsky, Noam. 2015. Problems of Projection: Extensions. In *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honor of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 3–16. Amsterdam: John Benjamins.

Culicover, Peter W. and Susanne Winkler. 2008. English Focus Inversion. *Journal of Linguistics* 44, 625–658.

Dikken, Marcel den. 2006. *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*. Cambridge, MA: MIT Press.

Emonds, Joseph E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax*: *Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York: Academic Press.

Fabb, Nigel. 1983. Three Squibs on Auxiliaries. *Papers in Grammatical Theory* (MIT Working Papers in Linguistics 5), 104–120.

Harwood, William. 2013. *Being Progressive is Just a Phase: Dividing the Functional Hierarchy*. Doctoral dissertation, Ghent University.

Heggie, Lorie A. 1988. *The Syntax of Copular Structures*. Doctoral dissertation, University of Southern California.

Hooper, Joan, and Sandra A. Thompson. 1973. On the Applicability of Root Transformations. *Linguistic Inquiry* 4:4. 465–98.

Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kaga, Nobuhiro. 1985. The Syntax of *Be* and *Have*: AUX or Main Verb『英文学研究』第62巻第2号 275–292.

Kayne, Richard, and Jean-Yves Pollock. 1978. Stylistic Inversion, Successive Cyclicity, and Move NP in French. *Linguistic Inquiry* 9:4. 595–621.

木村宣美2015a.「述語削除と法助動詞の陳述緩和的・根源的意味」『英語語法文法学会第23回大会予稿集』40–47.

木村宣美 2015b.「2種類の助動詞倒置」日本中部言語学会第62回定例研究会配布資料（静岡県立大学）

木村宣美 2016a.「述語削除と法助動詞mustの意味」『人文社会論叢（人文科学篇）』第35号，弘前大学人文学部，1–19.

木村宣美 2016b.「動詞句削除：2種類のbeに基づく分析」『日本言語学会第152回大会予稿集』186–191.

木村宣美 2016c.「連結詞beの語彙的特性に基づく動詞句削除分析」日本中部言語学会第63回定例研究会配布資料（静岡県立大学）

木村宣美 2016d.「述語句削除と法助動詞mustの陳述緩和的・根源的意味」Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka) vol. 23, 53–70.

木村宣美 2018.「BEの語彙的特性に基づく動詞句削除分析」Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka) vol. 25, 34–53.

木村宣美 2021.「動詞としての現在分詞being」『人文社会科学論叢』第10号，弘前大学人文社会科学部，35–55.

LaCara, Nicholas. 2015. Discourse Inversion and Deletion in *As*-Parentheticals. In *Parenthesis and Ellipsis: Cross-Linguistic and Theoretical Perspectives*, ed. by Marlies Kluck, Dennis Ott and Mark de Vries, 219–245. Berlin: Mouton de Gruyter.

McCawley, James D. 1988. *The Syntactic Phenomena of English Volume 1*. Chicago: The University of Chicago Press.

Merchant, Jason. 2013. Voice and ellipsis. *Linguistic Inquiry* 44:1, 77–108.

Milsark, Gary L. 1974. *Existential Sentences in English.* Doctoral dissertation, MIT.

Moro, Andrea. 1997. *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrase and the Theory of Clause Structure.* Cambridge: Cambridge University Press.

Moro, Andrea. 2000. *Dynamic Antisymmetry*. Cambridge, MA: MIT Press.

Park, Dong-Woo. 2012. An HPSG Approach to English Comparative Inversion. In *Proceedings of the 19th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar*, ed. by Stefan Muller, 310–329. Stanford, CA: CSLI Publications.

Potts, Christopher. 2002. The Syntax and Semantics of *As*-Parentheticals. *Natural Language and Linguistic Theory* 20:3, 623–689.

Ramchand, Gillian Catriona. 2018. *Situations and Syntactic Structures: Rethinking Auxiliaries and Order in English*. Cambridge, MA: MIT Press.

Ramchand, Gillian, and Svenonius, Peter. 2014. Deriving the Functional Hierarchy. *Language Sciences* 46, 152–174.

Roberts, Ian. 1998. *Have/Be* Raising, Move F, and Procrastinate. *Linguistic Inquiry* 29:1, 113–125.

Rochemont, Michael, S. 1978 *A Theory of Stylistic Rules in English*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Rochemont, Michael S. and Peter W. Culicover. 1990. *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sag, Ivan A. 1976. *Deletion and Logical Form*. Doctoral dissertation, MIT.

Samko, Bern. 2014. A Feature-Driven Movement Analysis of English Participle Preposing. *Proceedings of the 31st West Coast Conference on Formal Linguistics*, 371–380.

Stowell, Tim. 1978. What Was There Before There Was There. *Papers from the Fourteenth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*, 458–471.

Williams, Edwin. 1984. *There*-Insertion. *Linguistic Inquiry* 15:1, 131–153.